



暮らしの風景

短歌と建築・広場 日向市の駅 〔宮崎県日向市〕

若山牧水の歌碑が広場にある日向市駅。
連続立体交差と新しい駅が、
まちの東西をつないだ。
都市と鉄道が一体となったデザインの実現には、
人びとの共感を目指した、
立場を超えた志と、情感の共有があった。

文——篠原修 Osamu Shinohara
絵——佐々木悟郎 Goro Sasaki



「幾山河こえさり行かば寂しさのはてなむ
國ぞけふも旅ゆく牧水」。

平成十(一九九八)年十月十六日、日豊本線日向市駅に降り立つと、異様に立派な歌碑が目にとまった。それは度外れて大きく、鄙びた地上駅のホームにはいかにも不釣り合いだった。改札を出ると宮崎県と日向市の職員が待っていて、とんかつ屋に案内された。とんかつは旨かったが、町の店の多くはシャッターが降りていて歩いてる人はいなかった。夜は高台のバーベキューでの歓待。十月の日向は既に肌寒く、昼に巡った町を思い出すと心から楽しめる気分にはなれなかった。連続立体交差と新駅でこの町は再生できるのだろうか。一緒にいた都市計画の佐々木政雄、建築の内藤廣も同じ思いだったにちがいない。

第一回の鉄道高架検討委員会、平成十一(一九九九)年一月十三日、宮崎市。地元の宮崎大学、出口近士先生も出席。同僚の吉武哲信先生と共に地元をリードすることになる人物である。一回目は何事もなく終わったが、三回目に山がきた。同年十一月十日、日向市。JR九州がこれからのデザインは独自にやると言い出したのだ。それは従来からの連立事業ではむしろ常識だった。鉄道のこととは鉄道で、駅前広場は都市でというわけだ。そのやり方を打破するた

GORO

日向市がJR日向市駅西口に整備を進めてきた「交流広場」の完成を祝うオープニングイベント。噴水とせせらぎで遊ぶ子どもたち。



暮らしの風景



めに、われわれは呼ばれているのであり、県も市も苦勞して委員会を立ち上げたのだった。この第一の山は、県の井上康志さんの取りなしで何とか越えることができた。

今になって振り返れば、駅のホームにあった若山牧水の歌碑は、われわれの仕事の行く末を見通していた。われわれはそれから幾つもの山を越え、河を渡らなければならなかった。苦しみの果てなむ国は、なかなか見えてこなかった。

情感の共有なくして

平成十八(二〇〇六)年十二月十七日、新日向市駅開業。こんなにも多くの人を日向で見るのは初めてだった。駅のホーム、コンコース、自由通路、東口の駅前広場は人びとでごった返していた。一説に一人といひ、いや一万五千人だという。人口六万の都市である。

ここまで来れたのは、後に加わったアーバンデザインの小野寺康、デザインの南雲勝志の力と、県の中村安男、井上康志、藤村直樹、森山福一、市の黒木正一、和田康之以下の正一軍団の面々。途中から味方になったJR九州の津高守、永崎茂樹などなど。東京組、地元組の壁を越えた、また鉄道、都市、県、市、民間の溝を越えた志と、情感の共有があったからであろう。「情感の共有」とは環境省の生物多様性の委

員会で聞き、はっと思った言葉である。会議も終わりに近づき、司会の「何か質問は」に手をあげて、発言したのが精神医学の大井玄先生だった。「説明はよく分かりました。ただし、私はこの会場を出たら九〇パーセントは忘れていくでしょう。知識とはそういうものです。人はそれでは動かない。人が動くのは情感の共有あつてのことです」。なるほど、そのとき大井先生の言葉が確かに頭に刻み込まれた。

日向とその背後の耳川流域は、杉の大産地である。何とか杉を、杉を使ってほしい、これが地元の人、市の、県の、森林組合の願いだった。年輪幅の大きい、柔らかい日向の杉は構造物には向かない。「そこをなんとか」、に内藤は応えた。ホームの屋根を支える梁に、駅と広場をつなぐ庇に、杉はふんだんに使われている。広場のベンチにも、照明の柱にも、こちらは南雲の担当だった。

駅をデザインした内藤は言った。「困難なときにもみんなの心の支えになる風景であつてほしい」と。

牧水の歌のじゅんじゅん

平成二十一(二〇〇九)年四月二十九日、残っていた交流広場の竣工式と歌碑の除幕式。久しぶりに再会した牧水だった。祝詞があげられ、

内藤と献酒した。牧水は大酒飲みだったのである。太宰治、石川啄木。文学的才能はあつたのかも知れぬが、家庭人、社会人としては失格である。牧水もその類の人間だと思ひ込んでいた。それは僕の勝手な思い込みだった。平成二十三年(二〇一〇年)年七月二十日、宮崎の伊藤一彦先生に案内されて、僕は旧東郷町坪谷にいた。牧水の実家である。牧水は奥さん思ひの、子らを大切に詩人であった。伊藤先生は岩波文庫の若山牧水歌集の帯にこう書く。「旅の歌人牧水は、平易で親しみやすい、しかも人間と人生の根幹にふれて共感を呼ぶ、数かずの秀歌をのこした」。われわれがのこした駅と広場は、牧水の歌のごとくに時間を超えて人びとの「共感」を呼ぶことができるのだろうか。情感を伝える言葉と、物、風景の違い。この問いは重い。

ひとつの救いは、同年八月二十二日、口蹄疫で打ちのめされていた宮崎を復活させようとする、「がんばろうや宮崎、ひゅうが夏祭り」が駅前広場で開催されたことである。内藤の言う「困難なときにも……」の思ひの一端は果たされたといつてよからうか。(追記。興味のある方は『新・日向市駅』彰国社刊をお読みください。)

しのはら・おさむ ●一九四五年生まれ。一九七一年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。アーバンインダストリー、東京大学 林学科助手、同社会基盤学科教授、政策大学院教授などをへて、現在GSデザイン会議代表。土木設計家。



交流広場より日向市駅を見る。向かって右隅にかつてホームにあった大きな石の歌碑が移設されている。駅舎は、総括監修：篠原修。意匠統括：内藤廣。設計：内藤廣建築設計事務所・九州旅客鉄道・交建設計。施工：九州工業。竣工：2007年2月(第1期)、2008年2月(第2期)。